別記様式第４号

2019 年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

２０２０年　３月　１１日

<table>
<tr><td>報　告　者</td><td>学科名</td><td>造形デザイン学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>島田 清徳</td></tr>
<tr><td>研 究 課 題</td><td colspan="6">ユニバーサル・ミュージアムをめざした体感型展覧会の試み</td></tr>
<tr><td rowspan="4">研 究 組 織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所 属 ・ 職</td><td>専 門 分 野</td><td colspan="2">役　　割　　分　　担</td></tr>
<tr><td rowspan="2">代表</td><td>島田 清徳</td><td>デザイン学部
造形デザイン学科
准教授</td><td>テキスタイル</td><td colspan="2">作品の提供
ワークショップの立案・実施
展覧会実施後の記録集の作成</td></tr>
<tr><td rowspan="2">分担者</td><td>福冨 幸</td><td>岡山県立美術館
主任学芸員</td><td>展覧会企画</td><td colspan="2">展覧会の企画
展覧会実施後の記録集の作成</td></tr>
<tr><td>岡本 裕子</td><td>岡山県立美術館
主任学芸員</td><td>教育普及</td><td colspan="2">ワークショップの広報・記録</td></tr>
<tr><td>研究実績
の概要</td><td colspan="6">本研究は、ユニバーサル・ミュージアム（障害者を含め誰もが楽しめる美術館）の具体像を模索するための多様な活動を実践的に展開したうえで記録集を作成し、国内の美術館・博物館・関係機関に広く頒布することにより、ユニバーサル・ミュージアムの概念を普及させることを目的とする。

近年、ユニバーサル・ミュージアムの考え方に基づき、大学や学校現場と連携し、美術館のアクセシビリティを高める活動が着目されている。平成26年度、研究代表者は岡山県立美術館と連携し、鑑賞者が五感を通して様々な素材や造形の魅力に出会うことのできる展覧会を企画・実践した。加えて、ワークショップや出張講座等の関連事業により、児童や視覚障害者など、普段あまり美術館を利用していない人々の関心も促した。

今年度実施した体感型展覧会と関連事業は、前回の企画をさらに発展させ、従来型の視覚中心の鑑賞にとどまらず、身体感覚を通して作品や創造の楽しさを感じてもらい、鑑賞者・参加者から高い評価を得ることができた。</td></tr>
</table>

※ 次ページに続く

研究実績 の概要	【記録集】 通常の美術展覧会で作品に直接触る機会は少ないが、本研究においては“鑑賞者が作品に触れ五感を通して体感することのできる展覧会”の第二弾を開催し、関連事業を含めて多様な取り組みの成果を記録集としてまとめ、国内各地の美術館等関連施設に配布することにより、ユニバーサル・ミュージアムの概念を普及・浸透させるための一助とする。 【ワークショップ】 美術作品や美術館は「非日常」として捉えられるが、一方で美術作品を手で触れ体感することは「日常的な体験」「親しみやすさ」と重なり、現在求められている美術館の状況にも一致する。そこで、「日常と美術」をきっかけとし、“身体感覚を呼び覚まし、行為そのものを楽しむワークショップ” を実施し、参加者の行為と反応を分析することにより、ユニバーサル・ミュージアムをめざした体感型展覧会の新展開の可能性を探った。 〇研究代表者が実施したワークショップ： 3種類のテープを用いた “身体運動を伴い” “行為そのものを楽しむ” ワークショップを行った。 平成26～27年度に実施した同ワークショップは晴眼者のみを参加の対象としたが、今年度は、視覚障害者と晴眼者に同時に参加してもらい、視覚障害の有無を問わずに参加できるようプログラムを改良し実施した。
成果資料目録	展覧会記録集